

## はじめに

山崎 孝史

2004年度の地理学野外調査実習は2004年12月6日から10日まで沖縄県沖縄本島で実施された。実習地としての沖縄の選定はひとえに指導教員である私がフィールドとしているからであったが、沖縄に調査滞在することは受講生の学習意欲をそそるであろうとの目論見もあった。21世紀にはいつてからの沖縄は空前の「沖縄ブーム」の中で、年間500万人を超える観光客を受け入れ、テレビ・映画・音楽・出版といったメディアを通して連日本の私たちに対してその魅力を発信している。

しかしながら、私たちが日常見聞する沖縄のイメージに、果たしてどれほど沖縄固有の歴史や地理が「まっとうに」反映されているのだろうか。あえて、そうした歴史と地理を知ろうと努力することなしに、沖縄を理解することは今日ますます難しくなっているのも事実であるような気がする。そうした問題意識から実習の実施にあたっては3つのテーマ領域—「戦争・基地」、「自然・開発」、「文化・アイデンティティ」—を設定し、各テーマを2人の受講生が担当し、事前学習した上で現地調査に備えた。

沖縄ではまず第1日目に那覇市と宿舎のあった知念村を、2日目に名護市から中部地域を全員で巡検し、第3日と4日に各受講生がそれぞれのフィールドで調査した。以下の各章はそのフィールドワークの結果である。最終日は全員で玉城村の糸数壕周辺と那覇市の首里城を見学したあと帰路についた。連日、南部の知念村から各地への移動が続き、レンタカーを駆使したとはいえ、温暖な沖縄では結構骨の折れる調査日程ではなかったかと思う。各受講生にとって、初めての野外調査としては充実したものとなったのではなかろうか。

以下の各章は、上に述べた3つのテーマ領域の順に配置されているが、戦争と記憶、基地と地域社会、基地跡利用と自然の有効利用、伝統文化から若者文化へ、という大まかな流れがある。その意味では本報告書はタイトルどおり「沖縄の過去・現在・未来」を通観する構成となっている。加えて、若干通史的な概観を与えるために拙稿を最終章にすえた。まず沖縄について概観したい方は拙稿から読んでもらうと良いかもしれない。各章の評価は読者に委ねたいが、現地調査の結果をインフォーマントに還元し、さらに全国の関係機関に公表することの意味を踏まえた書き方が出来たかは、指導教員としてはいささか心もとない。記載内容の誤りや不十分な点については全て当方の責任である。

最後に、野外調査実習の実施に際して（株）仲里建設社長、仲里真光氏には、沖縄事務所を宿舎として使用させていただき、多大なお世話になった。また、エコネット美、興石正氏にはご多忙にもかかわらず「じんぶん学校」の活動について現地でご教示いただいた。この他、各受講生の調査にご協力いただいた関係者各位にもこの場をかりて厚く御礼申し上げます。